

# 市川九女八

長谷川時雨

青空文庫



若い女が、キヤツと声を立てて、バタバタと、草履ぞうりを蹴けとばして、楽屋の入口の間へ駈かけこんだが、身を縮めて壁にくつついていると、

「どうしたんだ、見つともねえ。」

部屋のあるじは苦にが々にがしげにいった。渋い、透とおつた声だ。

奈落の暗闇くらやみで、男に抱きつかれたといったら、も一度此処ここでも、肝きもを冷されるほど叱しかられるにきまつているから、弟子娘でしは乳ち房ぶさを抱かえて、息を殺している。

「しようがねえ奴らだな。じてえ、お前たちが、ばかな真似まねをされるように、呆ぼんやりしてるからだ。」

舞台と平時ふだんとの区別もなく白く塗りたてて、芸に色気が出ないで、ただの時は、いやに色つぽい、女役者の悪いところだけ真似るのを嫌いやがつている九女八くめはちは、銀のべの煙管キセルをおいて、鏡台へむかったが、小むずかしい顔をしている渋面が鏡に写ったので、ふと、口をつぐんだ。

七十になる彼女は、中幕なかまくの所作事しよさごと「浅妻船あさづまぶね」の若い女に扮ふんそうとしているところだった。

「お師匠さん、ごめんなすって下さい。華紅かこうさんが、他よそのお弟子さんと間違えられたのですよ。」

「静ちゃん、その娘に、ばかな目に逢わないように、言いきかせておくれよ。」

九女八は、襟えりおしろい白粉の刷毛はけを、手伝いに来てくれた、鏡のなかにうつる静枝にいった。根岸の家にも一緒にいる内弟子の静枝は、他のものどちがつて並々の器量うつわでないことを知っているので、

「静ちゃん、あすこの引抜きを、今日は巧うまくやっておくれ。引きぬきなんざ、一度覚えればコツはおんなじだ。自分が演やるときもそうだよ。」

静枝は——後に藤ふじ蔭かげ流の家元いえもととなるだけに、身にしみて年をとった師匠の舞台の世話を見ている。

名人と呼ばれ、女団十郎と呼ばれ、九代目市川団十郎の、たつ

た一人の女弟子で、九女八という名をもらっている師匠が、歌舞伎座のような大舞台を踏まずに、この立派な芸を、小芝居こしばいや、素しろろと人まじりの改良文士劇や、女役者の一座の中で衰えさせてしまふのかと、その人の芸が惜おしくつて、静枝は思わず涙ぐんだ。

鏡へうつる眼のなかのうるみを、見られまいとしてうつむくと、あなたに、九女八くじゅうはちづきの狂言方かた、藤台助ふじだいすけが入口いりぐちの暖簾のれんを頭でわけてぬつと室へやへはいつて来た。

「どうしたんだ、叱られでもしたのか。」

そういうのへ、九女八は審いぶかしそうに顔を向けた。静枝へいつているのではないと思つたからだった。

「ははア、からかったのはお前さんか。」

九女八は、若い女ものへ調から戯かいたがる台助のくせを知っているので、口へは出さないが、腹の中でそう思っている。

「師匠、この次興行、浅草へ出てくれないかというのだが——」  
静枝は、台助の顔を、睨にらむつもりではなかったが、そう見えるほど厳しく下から見上げた。今もいま、師匠のかけがえのない好い芸を、心の中で惜んでいたのに、このお爺じいさんは見世みせものの中へ出すのか——と思つたからだ。

「なんだ。二人とも、妙な面つらあするんだな。」

座頭ざがしらへむかつて、仮にも、狂言方が、そんな、いけぞんざいな言葉がいえるはずはないのだが、台助は九女八の夫で、しかも、九女八に惚ほれ込んで、大問屋の旦那が、家も子も女房も捨て、小

芝居の楽屋へ転がり込んだという、前身が鼯鼠筋ではあるし、今も守もりずみ住ずみさんで通っている亭主だったのだ。

「考えておきましょうよ。」

女房の九女八は、女なん団だん洲しゅうで通る素帳きちょうめん面めんな、楽屋でも家庭うちでも、芸一方の、言葉つきは男のようだが、氣質のさっぱりした、書や画をよくした、教養のある人柄だった。

馴なれてるとはいいながら、九女八の扮装は手早かつた。水刷毛みずばけをなすると、眉まゆは墨をチョンと打って指で引っぱる。唇くちびるの紅は、ちよいとつけて墨をさして、すつと吸っておくばかりだ。

それでもう、生いきいき々いきした娘の顔になっている。子供こどものときから、御狂言師おんきやうしで叩たたき込んでるので踊のおさらいのような、けばけば



しい鏡台前ではなかつた。筆は一本兎うさぎの足が一ツという簡素さだ。お茶とかき餅もちがすきなので、それだけは、いつも傍かたわらにある。

「桂かつらがさきへ帰るからね、晩御飯に、さんま食べるって——浅あさづ漬けもとつといておくれ。」

湯呑ゆのみと手鏡を持って、舞台裏まで附いてゆく静枝にいいつけた。

根岸うちの家は茶座敷などもあつて、庭一ぱいの鶯さぎそ草が、夏のはじめには水のように這はう、青い庭へ、白い小花を飛ばしていた。そんな日の午前あさ、紫の竜りゆうもん紋あわせの袷ひふの被衣あわせを脱いで、茶筌ちやせんのさきを二ツに割つただけの、鬢かつら下地したじに結ゆつた、面長おもながな、下ぶ

くれの、品の好い彼女は、好いかつこう恰好をした、高い鼻をうつむけて、そのころ趣味をもった、サビタや、メシヨンや琥珀こはくのパイプを、並べて磨いている。

養女の菊子に、台助が、意味をもった眼づかいをして、何か小用を、甘ツたるく言いつけているのを後にきいて、軽く眉をひそめていたが、台助が外出した気配にホツとしたようで、

「静枝さんは、依田先生よだのところへいつたかい。」

「ええ、丁度、今帰りました。坂本の榮泉堂おかのへお菓子を買いいいしたら、帰りが一緒になりましたの。」

と、内弟子の華代子かよこが、餅菓子を好い陶器やきものの鉢はちへ入れて持って来ていった。

二人の内弟子のうち、華代子は他のものにはきらわれたが気に入りのので、師匠の小間使いをしている。静枝には海老茶袴えびちやばかまをはかせて玄関番をさせ、神田小川町の依田百川ひやくせん——学海翁がくかいのところへ漢学をならわせにやるのだった。

「女役者だって、学問があつて、絵が描けなければだめだよ。」

彼女も、用がなければ、サビタのパイプを弄いじる前には、絵筆を捻ひねつていたのだった。

けれど彼女に、守住月華げっかという雅号のような名があるのは、絵を描くためではなくつて、明治十一年ごろからはじまった、演劇改良会の流れで、演劇改良論者の仲間であつた学海が、明治廿四年浅草公園裏の吾妻座あづま（後の宮戸座）で、伊井蓉峰いひようほうをはじめ男女

合同学生演劇済美館の旗上げをした時、芳町よしちようの芸妓米八よねはちには千歳米波ちとせべいと名乗らせた時分だったか、もすこし後あとで、川上貞さだや奴つこを援助たすけに出た時だけに、彼女にも守住の本姓に月華という名を与えたのだった。

岩井彘くめはち八といった時分の弟子には、紀久八きくはちたちがあるが、月華かこうになつてからは、かつらとか、名古屋の源氏節から来た女にも華紅かこうとか、華代子とかいう名をつけた。新しい弟子の静枝こじも、学海居士こじが名づけたのだった。

彼女は、好物な甘いもので、苦にがいお茶を飲んで、閑しずかな日が、気持ちよげだった。

「こんやは一ツ、静しずちゃんに『舌出しし三番』でも教えるか。」

といつたが、古い日のことを思出したのであろう、お前の踊の師匠だつた、おとねさんは、しどいよ、と言つた。

おとねさんという名をきくと、静枝は故郷の新潟の花柳界を思ひだした。静枝の踊の師匠は、市川の名取りで、九代目団十郎の妹のお成さんという浅草聖天町にいた人の弟子だつた。

「そういえば、お師匠さんが新潟へお出になつた時、あたしはまだ小つぽけでした。お揃いの浴衣を着て、川蒸気船の着く、万代橋の川つぱたまで、お迎えに出ていましたっけ。」

「うん、そんなこともあつたっけね。」

九女八は凝と、庭の鷺草を見つめた。

新潟の花街で名うての、庄内屋の養女だつた静枝までが、船

着き場へ迎いに並んだほど、九女八の乗り込みは人気があつたのだが、それも、会津屋おあいといつた芸妓が、市川流の踊りの師匠で、市川とねと名のつていたから、同門の誼みで、華々しく迎えたのだつた。

土地の顔役で、江戸生れのお爺さん、江戸鮎の孫娘に生れた静枝は、直江津までしか汽車のなかつた時分の、偉い女役者が乗込んで来た日の幼かつた自分の事も、あの、日本海の荒海から流れ込んでくる、万代橋の下の水の色とともに目にうかべ、思い出していた。

「出しものは道成寺だ。勸進帳を出したのは、興行師らから、断わりきれない頼みだつたんだ。そのこたあ、おとねだつて

知つてたのに。」

それがもとで、市川升之丞ますのじようの名を取り上げられ、九代目団十郎から破門され、また岩井桑八の名にかえて、暫くしばら蟄伏ちつぷくしなければならなかった、嫌な思出と、若かつた日のことなども、それからそれへと、九女八も思いうかべている。

「お師匠さんは、新潟へ入いらした時から、九女八だつたとばかり思つてました。あたし、ちいさい時でしたから。」

「市川升之丞さ。」

九女八は、タバコやに 苘あめの脂すきとおの流れた筋が、あめ 飴色すきとおに透通すきとおるようになった、琥珀こはくのパイプを透すかして眺めて、

「あたしは、一番はじめの、踊の名取りがばんどうけい 阪東桂八はちさ。それ

から、女役者になつて岩井糸八、それから市川升之丞、守住月華、市川九女八さ。」

随分とりかえたものさねと、自分のことではないような、淡々としたふうについて、

「だが、師匠運は、ばかに好いのさ。阪東三津江というお狂言師は、永木三津五郎という名人の弟子で、まあ、ちよつとない名人だよ、高名なものさ。岩井半四郎は、大杜若と呼ばれた人の孫だつたかで、好い容貌の女形だつた。けれど、なんといつたつて、市川宗家ほどの役者の、門弟になつたなあ、あたしの名誉さ。」

ほんとに、団十郎の芸には心酔している言いぶりだつた。



「好い先生といえ、ねえ、お師匠さん、依田先生が、和歌も学んだ方が好いから、竹柏園ちくはくえんに通つたらどうだと仰しやつて、入門のことを話してあげると仰しやいました。」

「そりやあ豪儀だな。」

ふくみ笑いを、ほんとに笑つてしまつて、

「学問は上達しても、踊が、あれじやあなつてねえな。お前めえたちは、踊つてるんじやなくて、畳なを嘗めてるんだ。」

機嫌の好い皮肉だつた。

「あつしや全体、神田の豊島町としまちようで生れたんだけれど、牛込うしごめの赤城下あかぎしたに住んでたのさ。お父さんはお組役人——幕末あゝのころの小役人こやくなんざ貧乏だよ。赤城神社あかぎさまの境内なにかに阪東三江八つてお踊の

師匠さんがあつてね、赤城さまへ遊びにゆくと、三江八さんのところの格子こうしにつかまつて覗のぞいてばかりいたのさ。」

呼びこまれて踊つてみると、見覚えで踊れた。それから親にはないしよ内密で教えてくれたのだが、お母さんが肩を入れだして、どうかお父さんに許されるようにと、何かの祝いわいごと事ことのあつた時、父親やその仲間のいるところで本式に踊らして見せたので、その後、直に父親を歿なくなしてからも、十三、四から踊りの手ほどきをして、母親と二人で暮くらしていったのだがと、めずらしく身の上ばなしをしだした。

「お文ぶんさんという、常磐津ときわづの地で、地弾じびきをしてくれる人が、あたしを可愛あがつてね。小石川こいしがわ伝通院でんづういんにいた、高名な三津江師匠

のところへ連れてつてくれたのだが芸は怖こわい。」

と彼女はふとい息を吐いた。

「それまで、あたしが踊つてたのは、手ふりさ、踊りなんかじゃないのさ。それから、本当の踊りをしこまれた。」

「そういえばお師匠さん、高橋お伝をおやんなさったことがあるでしょ。」

「ああ、たしか明治十七年ごろだった。」

「いいえ、もつとあとで、見た人が、お伝になった、お師匠しよさんの扮装おつくりを見て、お師匠しよさんの若い時分——年増としまぶりを見た気がしたって、言つてました。」

「あツしやあ、あんなじやなかつたよ。」

苦りきつたかげが唇をかすめたが、湯呑の銀の蓋をとつて、お茶を飲んでしまった。

「もつとも、あの着附きつけは、あの時分の年増の気のきいた好みさ。

だが、あツしばかりじゃない。全体、あの『綴合とじあわせ於伝おでん仮名書のかながき』

というのは、いつだったかねえ、お伝の所刑しよけいは九年ごろだった

から——十一、二年ごろに菊五郎ぐだいめが河竹黙阿弥かわたけもくあみさんに書下しかきおろ

てもらつて、そうそう裁判所おおづめのところが大詰おおづめに出るので、大道

具長谷川勘兵衛かかんべいさんと、裁判所まで行つたんだよ。なんでも、そ

の時の話に、おでんという女ひとは伝法でんぼうな毒婦どくぶじゃなくつて、野暮やぼ

な、克明な女だから、そういうふうやに演るやつていったことだが——

——そうかも知れないね。お伝は、上州沼田というところの御家老

の落し種で、利根とねの方の農家おひやくしやうのところで生れたのだそうだから。」

「でも、お師匠ししよさん、すこし根下りの大丸鬚おおまるまげに、水色鹿がの子の手柄べっこうで、鼈甲くしの櫛くしが眼に残っていますつて——黒っぽい透綾すきやの着物に、腹合せの帯、襟裏えりうらも水浅黄みずあさぎでしたつてね。そうだ、帯上げもおなじ色だったので、大粒な、珊瑚珠さんごじゆの金簪きんかんざしが眼についたつて。」

朝、目が覚めて、蚊帳かやから出た時に、薄暗い庭の植込みに、大輪あじさいな紫陽花の花を見出すと、その時の九女八のおでんが浮びあがるといったことや、それは、浅草蔵前くらまえの宿で、病夫浪之助を殺して表へ出た時の着附きつけだったか、捕まる時つかのだから、そんなことは

もう、<sup>おぼろ</sup>朧げになつてしまつているといつてたのを、はなした。

「お師匠さんは、あんな役、<sup>きら</sup>厭いなんですよ。」

「まあね、いつて見れば、あたしは、女団洲と呼ばれたくらいだし、自分でも、<sup>くだいめ</sup>団十郎のすることの方が好きだから——わかりもしないくせに、高尚ぶつてるといわれたりしたけれど、もともとお狂言師は、<sup>きぜわもの</sup>生世話物をやらなかつたからねえ。それが癖になつて、<sup>ざんぎり</sup>新世話物に行けなかつたのかも知れない。」

——けど、おかしいわ、ちつと——

そうそう、新入門の、とし子さんならば、そうハキハキと問えるかもしれない、と考えながら、静枝は、

「でも——それでも、お師匠<sup>しよ</sup>さんは、もつと新らしい、書生芝居

にもお出なすつたのでしよう。」

九女八は、理窟りくつを言う、静枝のみずみずした丸い顔を見て、

「あたしは、こんな、小さな柄がらだけれど、毛剃けそりだの、熊谷くまがいの陣

屋だの、あんなものが好き。山姥やまうばなんぞも団十郎のいきで、彫ほ

刻りもののように刻ほりあげてゆきたい方だが、野田安のだやすさんて、松駒まつこま

連れんの幹事さんで芝居に夢中な人が、川上さんのお貞さんを助け

て出ると、なんといつてもきかないのでね、芸は修業だから出も

したし、それに文土方の新史劇の方は、——史劇は団十郎ししゅうも気を

入っていたのだもの。」

彼女はふと気を代えていった。

「お前さんも、あんな、抱えの芸妓衆げいしやしゅうや、娼妓おいらんが、何十人

いるうちの、踊舞台だつて、あんな大きなのがある、庄内屋さんあととりの家、督娘もたらに貰われてて、よくよく芸が好きなればこそ、家を飛出してあたしんとこなんぞの、内弟子になつてるんだから、よく覚えてくれなけりやあ、しようがない。」

そら、お談議になつたと、静枝がかしこまつて、閉へいこう口しかけているところへ、

「今日きょう、お髪ぐし、お染めになりますか。」

と、風呂ふろの支度をする女中がききに來たので、静枝は、やれ助かつたとホツとした。



——降り出した雨。

ト、舞台は車軸を流すような豪雨となり、折から山中の夕暗、  
 だんまり模様よろしくあつて引っぱり、九女八役は、花道七三  
 に菰をかぶつて丸くなる。それぞれの見得、幕引くと、九女八起  
 上り合方よろしくあつて、揚幕へ入る——

蚊のなくように、何時、どこで、なんの役でかの、狂言本読み  
 の、立作者が読んできかす、ある役の引っこみの個処が、頭の奥  
 の方で、その当時聴いた声のままに繰返してきこえる。それにつ  
 いて、その役の、引つ込みの足どりまで、九女八は眼の前の、庭  
 の雨を眺めながら、考えるともなく考えているのだった。

——はて、この役は、女だったかな、男だったかな——

ながい舞台生活は、華やかなようでも、演る役は、普通生活とおなじで、そうそう他種類はない。自分についた持もちやく役は大概きまっついていて、柄にない役はもってこないのだが、どうしたことか、今考えている役がなんだか、九女八には思いだせない、それに、なんでも思い出さなければならぬことでもない。と、そう思うかげに、ながい間役者をしたが、とうとう、団十郎ししやうと一つ舞台に並べなかつたという、何時も悲しむさびしさが、心の奥を去来していた。

「あたしは、考えかたが、間違つてた。」

九女八は、鷺草の、白い花がポツポツと咲き残るのへ降る雨が、

庭面にわもを、真つ青に見せて、もやもやと、青い影が漂うようなのに、凝きつと心をひかれながら、眩つぶやいた。

「なにがよ。」

芸者や、役者の配り手てぬぐい拭ぬぐの、柄の好いのばかりで拵こしらえた手拭はつたん浴衣を着て、八反ひらの平ぐけを前でしめて、寝ころんだまま、耳にかんぜよりを突ツこんでいた台助が、腑ふにおちない顔をした。

「なんてって——」

九女八は、まだ、素足すあしの引っこみの足どりの幻影かげを、庭の、雨足のなかに追いながら、

「成田屋ししやうのうちの庭は、あすこらあたりに、大きな、低い、捨石があつたつけが——」

と、自分でも思いがけない、話の本筋とは違うことを、ふいと、口に浮び出したままいった。

「お歿なくなんなすつてからも、居間おへやの前の庭は、当時そのままだから——」

九女八は、一木一石といったふうの団十郎ししやうの家の庭うちに、鷺草が、今日も、この雨に、しつとりと濡ぬれているだろう風情ふぜいを、思うのだった。

台助は、なんとなく顔をあげて、庭もせから、部屋の中を見廻まわした。其処そこには、自分の趣味なんぞ半欠かけらもなかつた。九女八の好みであり、それは、彼女が私淑くだいめした成田屋好みである、書画こつとう、骨董、それら、人格に深みを添えるたしなみが、女役者の住居すまい

とは思わせなかつた。

「高田先生（早苗<sup>さなえ</sup>）は、あたしを女のまままで、女役にして、団十郎<sup>じゅうじゅう</sup>の相手を演<sup>や</sup>らせてくださろうとなさつたのだったと、はじめて——始めて、わたしは気がついた。」

九女八の唇は細かくふるえている。ちらりと、それを、台助は見ないのではないが、

「今更おそい——か。おくれたりだなあ。」

同情しながら、わざというのかもしれないが、おひやかしたふうにもとれた。が、九女八はそれにはかまわず、

「師匠の芸の神髓<sup>しんすい</sup>を掴<sup>つか</sup>んだ、と思つたのは真似<sup>まね</sup>だけだったのか——師匠は、女団洲<sup>おんなだんす</sup>なんて、嫌<sup>いや</sup>だつたらうなあ。」

「だつてお前めえ、団十郎なりたやだつて、高田さんにそういつたつてじゃねえか、九女八あれが男だと、対手あいてにして好い役者だつて——だから、お前が、女に生れたつてことが、師匠くだいめといつしよに演やれなかつたということなんで、生れかわらなきや、頭から駄目だつたのだ。」

「そうじゃありませんよ、静枝やとし子さんの考えを見ても、川上さんや、依田先生たちのことを思い出しても、あたしは、毛剃けそりや、弁慶うまが巧うまかつたのがいけなかつた。」

「高田先生は、そのつもりだつたのかも知れないが、宗家そうけはそうじゃなからうぜ。」

「あたしを女優——女形おやまとして、相手にはしなかつたらうとですか？」

「そうじゃないか、彼女あは立派な役者ものだ。男おれだったら、俺おれの相手だがと、だから、高田先生せんせいに言ったんだ。」

「いいえ。」

九女八はしみじみとして、

「あたしがねえ、小芝居ばかりに出ていたので、どうかして、あれを止めやねえものかと仰しやつてたそうだから——」

どんちよう  
緞帳

芝居——小芝居へ落ちていた役者ものは、大劇場出身者で、

なだいやくしや

名題役者でも、帰り新参となつて三階の相中あいちゆうべや部屋に入れこみ

で鏡台を並べさせ、相中並の役を与え、慥たしか三場処ほど謹慎しな

ければ、もとの位置にはもどさない仕来りしきたがある、階級的な差別

の厳しいのが芝居道だった。

九女八は、下谷したや佐竹さたけツ原つばらの浄じやうり座ざや、麻布あぶ森もり元もとの開かい盛せい座ざを廻まわり、四谷よつやの桐きりぎり座ざや、本所ほんじよの寿じゆ座ざが出来できて、格かくの好このい中ちゆう劇げき場ばうへ出でるようになるかと思おもうと、また、神田かんだの三みや崎さき町ちやうの三みや崎さき座ざに女役にやうやく者の座ざ頭がしらになつてしまつたりする。その上に、勸進帳こんしんぢやうのこゝとで破門はもんされたりして、九代目くだいめに芸げいを認まめてもらえながら、引上ひきあげてもらもらう機運きうんをはずしたのだと、もう、どうにもしようのない侘わびしささを、囓かんでいる。

「二銭にせん団洲だんしゆうだつて、歌舞伎座かぶぎざを踏ふんだのにな。」

台助たいすけは、はずみで、そんなことを言いつてしまつてから、しまつたと思おもつた。九女八くにやぱちが苦にがい顔かほをしたからだつた。二銭にせん団洲だんしゆうとは、下谷したやの柳盛座りゆうせいざで、二銭にせんの木戸きど銭ぜにで見みせていた、阪東はんとう又また三郎さぶらうが、



めっかちではあるが団十郎を真似て、一生の望みが叶<sup>かな</sup>つて、歌舞伎座の夏休みのあきを借りて乗り出したことがあつたのを、いかもの食いの見物が、つねづね<sup>うわさ</sup>噂に聞いた二銭団洲を見にいった。出しものは「酒井の太鼓」だったが、あとで座付き役者から物議が起つたことがあつたりした、九女八にはいやな、ききたくないことなのだ。

「仕方がないよ、あたしは、はじめっから小芝居へ出てたものね。女役者なんて、あたしたちから出来たのだもの。」

九女八は、老<sup>おい</sup>ても色の白い、柔らかい足を出している、台助の足の小指に<sup>さわ</sup>触つて見た。

台助は、<sup>つやつや</sup>艶々とした、額から抜け上っている頭の禿<sup>はげ</sup>かたも、

柔和な、品の悪くない、いかにも以前は<sup>もと</sup>大問屋の旦那であつたといふふうな、鷹<sup>おうよう</sup>揚さと、のんびりした<sup>みみたぶ</sup>耳朶とを持っている、どこか好色<sup>とじより</sup>そうな老爺<sup>とじより</sup>だつた。

「大阪の千日前<sup>せんきちまえ</sup>へ<sup>あしべくらぶ</sup>芦辺倶楽部といふのが出来るそう、師匠が出てくれるならば、月額千円は出すといふのだそうだ。」

九女八は、考え、考え、台助の小指をいじりながら、

「見世物小屋ではないでしょうかねえ。でも、お金が溜<sup>たま</sup>れば、も一度、何か、やって見る事も出来るでしょうから——」

「一年十二ヶ月、頭から約束しようといふのだが——<sup>いて</sup>痛えよう。」  
と、台助は足をひっこめた。

「そりやそうと、<sup>しげ</sup>繁の井<sup>い</sup>を久しくやらないね。」

「染分そめわけ手綱たづなですか——繁しげの井いをすると、思い出すものね。」

弟子でしぶん分ぶんだった 沢村さわむら紀久八きくはちが、お乳ちの人ひと繁しげの井いをしていて、じ

ねんじよの三吉さんきちとの子別こわかれに、あんまりよく似にている身みの上うへにつ  
まされ、役やくと自分自分とのわけめがつかなくなつて、舞台ぶたいで氣きの狂くるつ  
てしまつたことを思い出すからだった。

しかも、その、女役者にょやく紀久八きくはちは小説しょうせつにもなり狂言きやうげんにもなつてい  
る。佐藤さとう紅緑こうろく氏の「侠艶録きやうえんろく」の力枝りきえという女役者にょやくは、舞台  
で氣きの狂くるつた紀久八きくはちがモデルであつた。小栗風葉おぐりふうようだったかのに、  
「鬘かづら下地したじ」というのがある。

「紀久八きくはちは舞台ぶたいで氣狂きくるいになつたが——あたしは舞台ぶたいで死ねれば  
本望ほんぼうだ。なあに、小芝居こしばいだつて見世物みよもの小屋こやだつて、お客おきゃくさまはみ

んな眼玉をもつてらっしやる。どんな人が見てくださってるかわかりやしない。」

「じゃあ、まあ、とにかく、大阪の方の話は、出来そうな工合に、返事をしといてもいいね。」

——これは、もちつと後のことあとで、九女八はこの大阪から帰つてから後、大正二年の七月に、浅草公園の活動劇場しばいみくに座で、一日三回興業に、山姥やまうばや保名やすなを踊り、楽屋で衣裳いしやうを脱ぬごうとしかけて卒倒し、そのままになつてしまつたのだつた。大阪で溜ためて来た金は、九女八が、何か計画して考えていたことには用いられず、終しゆうえん焉んの用意となつてしまつたのだが、台助は、そんな予感がしたのかどうか、ふいと、仕かけていたその談話を打ち切

つて、

「俺は、ちよいとその事で、出かけてくる。」

と着更きがえをしかけたところへ、静枝が名刺を読みながら来て、

「お師匠さんの芸談を聴きに来た、演芸の方の記者かたらしいのです

よ。談話はなしといてくださった方が好いと思いますから、お逢いにな

つてくださいな。」

と、婉えんきよく曲まがに、この名人の真相を残させたい、弟子の心やりで

すすめた。

「じゃあ、茶室へでもお通ししといておくんなさい。」

と九女八が言っているうちに、台助は玄関で、来訪者と摺すれちが

いに、傘をさして、門の外へ出ていった。

「おや、お出かけですか。」

と、台助に声をかけたのは、通りかかった芝居道に通じている、芸人の間を歩き廻る顔の広い男だった。その男は、九女八の家のうちの門口で、顔馴染かおなじみの台助に逢うと、いま聞いてきたばかりの、煙けむの出るような噂がしたくてたまらなくなったように、

「そういえば、御存じだろうが、あつしやあ今聞いたばかりのホヤホヤなんだ。話は古いことだが、お宅の師匠は、以前もと、堀越ほりこしから、なんとという名をおもらいなすつてた。」

「升之丞ですよ。」

「そうだつてねえ、守住さん。それについちやあ、面白い話があるんだ、何時いつ、九女八とおんななすつた。」

「さあ、たしか、しんとみちよう新富町の市川左団次さんが、わび謝に連れてつてくださつて、きさん帰参が叶つたんですが——ありやあ、廿七、八年ごろだったかな。」

「そこなんだよ守住さん、御勘気に触れて破門された時に、師範状を取上げに行つたのは、だんしゅうろうえんし談州楼燕枝（はなしか落語家）だったつてね。それがね、そうけ宗家へおさめねえうちに、その師範状をなくしちゃつたんだとき、すっかり忘れてると、急に帰参が叶つたので、やっこ奴さん弱つたのなんのつて、でね、九代目の女弟子で、もとが岩井糸八だから、糸の字を九の字と女めの字にした方がいいて、こじつけちやつたんだそうだが——こっけい滑稽さね。」

「へえ、そんなことがありましたんですかねえ。」

台助は、傘を打つ雨を見上げた。上層そこは晴れているのか、うす鼠色ねずみの雲からこぼれてくる雨は白く光っている。

「ねえ、お前さん、この雨の工合は、九女八うちの芸のような——地震加藤とか光秀みつひでをやる時の——底光りがしてるじゃねえか。木きの下尚江さんという先生は、日本にすぐれた女性が三人ある、おそ畏れ多いが神功皇后様を始め奉り、紫式部、それから九女八だと仰しやったそうだが——」

と、たいして親しくもない男へも言いかけた気がした。

家うちでは九女八が、訪問者へ、こんなふうな懐古談をしているときだった。

「母が再縁いたしますと、養父が自儘じまな町住居ずまいをしているような、



道楽者の武家として、私は十六の年、小石川水道町で踊の師匠をはじめました。ええ、私がごく小さい時分に、両国におでこ芝居がございましたのと、うねめ 妾女が原にはら 小三こさんという三人姉妹の芝居があり、も一つ、鈴之助というのがあっただけで、これらはよしずば 葭篋張りの小屋でございますから、まあ私どもが、芝居小屋でやりました女役者のはじめのようなもので——初開場？ さつまぎ 薩摩座の出勤には、政岡と仁木。その次が由良之助でございました。」

語りさして、彼女もふと、白い雨のこぼれてくる、空を見上げていた。



# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「春帯記」岡倉書房

1937（昭和12）年10月発行

初出：「東京朝日新聞」

1937（昭和12）年6冊23～29頁

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 市川九女八

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>